
ヴァンパイアなんて怖くない！？～銀と月～

兄琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイアなんて怖くない！？～銀と月～

【Zコード】

Z5305F

【作者名】

兄琉

【あらすじ】

満月の夜、エクソシスト銀次とあるヴァンパイアが出会い。二人の出会いは偶然にして必然だった。二人の道が交差する時...何が起こるのだろうか。前作「ヴァンパイアなんて怖くない！？」のサブストーリー的な位置づけの作品です。バトルもほとんどない短めの作品なので前作を読まれてから読むことを推奨。

(前書き)

前作「ヴァンパイアなんて怖くない！？」のサブストーリーのような位置づけの作品なので前作を読まれてから読む事を推奨します。

後、バトルはありません。

ねえ、ヴァンパイア（吸血鬼）っていうと何ひ？

つと、あれ？君は確か…ああ、あの時の。
久しぶりだね。そうでもないかな？

隣の君は…はじめましてだね。

今夜もお話を見に来たのかい？

ふふ、やつぱりね。瞳がそう言つてゐる。

今晚はここのつの調子もいみたいだし見せてあげれそうだ。

さてさて前は何を見たんだつたかな？

ロキと桜の出会いの話か…。

あの出来事は起つるべきして起つたのかどうなのか…・・・おつ
と、今はここまでにしておいつ。

楽しみつてのは後に取つておるものだよ。ショートケーキのイチ
口みたいにね。

となると次はこの話かな。

ん？…そつか、君ははじめてだつたね。後で教えてもらひなよ。
隣のお友達は早く続きを見たくてひづひづしてゐるよ。

さてと、じやあ早速始めようか。

今日のお話は満月の夜に出会つた、とある有名なエクソシストと

とあるヴァンパイアとの出来事のお話。

え？ 僕はだれかって？

しつこいなあ、君は…。死にたいの？

ふふ、『冗談だよ。

さあお話が始まっちゃうよ？

今回の主人公はあの有名な退魔師、銀次だよ…。

「……ふう、どうやら振り切ったかな？」

ガサリ、と木が揺れたかと思つと男が茂みから顔を出した。
見た目は20代前半ほど、少し背が高いだけの至つて普通の男…
に見える。

見える…とはどういふことか。つまり、この男はヒトではない。

この男はヴァンパイアだ。いたつて普通のニット帽に革のジャケット、両手にはまつた皮手袋、ジーンズ…。
それでも男はヴァンパイアだった。

男は体のところどころに汗で張り付いた葉をはらい立ち上がった。
空に浮かぶ満月を背負つて立つ姿は絵になつていてる。

「さて、と…どうしたものか。」

「おっ俺もどうしようか悩むところだ」

ヴァンパイアの小僧は「あらの声に驚き、俺を視認した後で距離を取るよう下がつた。

俺はとこりと顔を茂みから出したままの何とも情けない格好だ。

「20分ほども同じ茂みに隠れていた仲。警戒を緩めてはどうだ？」

俺はゆっくりと諭すように言つ。顔を茂みから突きだしたまゝ。小僧の方は驚愕をあらわにするがすぐに表情を引き締める。

なかなかいい顔をしている…。まだ粗削りだが素質はあるようだ。

「ふふ…磨けば光る原石というやつか…面白い。」

「そんなことを言つている暇があつたら出て来い」

冷静に突っ込まれた。

俺はゆっくりと茂みから体を出し、葉をはらつた。

小僧の体は衰弱しきつて、魔力も死きかけている。

「さて、と…どうじたもんかね。」

俺は左手の中指と親指の関節をはじきパチンと軽い音を一度ならした。

小僧の体を微弱な魔力が覆つていて、俺はあることに気がついた。

：小僧の左手の甲を中心にはじき魔力の流れを感じる。
封印、血縁、花嫁…様々な単語が俺の頭の中を巡りひとつ答える導きだす。

「なるほど、小僧が花嫁の寵愛を受けた息子…といつわけか」

俺は視線を小僧の左手に移す。すると反射的に小僧は左手を抑えた。無言の肯定とみていいだろう。
さて、と……」で問題がある。

（何故ここに止まっているのか？何故、隠れていたのか？）

俺は先日からとあるヴァンパイアを追つている。

ヤツの仲間か……いや、それにしては衰弱しきつていて。

しかし追われている身には変わりがないのだろう、本当にあれが

花嫁の寵愛の証ならばだが。

となれば偶然か……いや、元老会クソじじいどもが手を回していると考えれば納得はいくか。

小僧をここへおびき寄せ、俺の追つているヴァンパイアに殺される腹か……？

俺は結論を弾き出すと同時にすぐ動きを考ふる。

（俺はここ的小僧を一度守らねばならないのか）

小僧が本当に花嫁の一人息子なのであれば……俺は約を果たさねばならない。

そして何より俺のエゴとも言える、ある者がその結論を導いた。

俺は……愛する者に手を下させる様な真似はしませんでした。

「さて、と……どうする？死にかけの体で俺と戦つか？それとも逃げるか？」

「ああ……戦つて死ぬのも悪くはないかな、もう、疲れたんだ……同胞でない退魔師ならば契約に反していいだろう」

小僧はフツ、と力なく笑みを浮かべ俺に近づいてくる。

「小僧…お前自分が言つてることを分かつてているのか」

花嫁の寵愛は肉体を糧として発動するヴァンパイアの中でも花嫁にしか扱う事が出来ないとされている最上級の秘法だ。

だが、イコール死、ではない。

封印を正常な手段で解除することができれば、花嫁は元に戻る。寵愛の証の秘法は同胞であるヴァンパイアに殺されると、その封印の糧となつた花嫁の魂はこの地に縛り付けられ净化することがない。

だが退魔師となれば話は別だ。退魔師の浄化の秘法を以てすれば封印者と花嫁の魂を同時に浄化することができる。

平たく言えば、眼の前の小僧ごと花嫁を浄化…つまりは殺すという事だ。

…だが、俺には浄化の秘法を使う事が出来ない。

とある力を手に入れたことにより俺の退魔師としての力は制限された。

仮に俺に秘法行使する力があつたとしても…。

「いたぞツー逃がすなつ！」

怒声と共に小僧の追手であろう男が一人ほど現れた。

俺が後ろを振り向いたときにはすでにボウガンの矢が放たれて、確実に俺と小僧を貫くライン上に矢は乗つていた。

小僧に避ける様子はない、避ける元気もないというのが正解だろうが。

このままでは二人ともやられる…はずだ。
しかし…

俺は左手をボウガンの飛んでくる方に突き出し、親指と中指の関節を擦り合わせるように「一度滑らせ…

パチン、パチンという乾いた音が一度、公園に響いた。

「いつッ！」

確実に俺たちを貫くはずだった矢は一本は小僧の右手をえぐり、もう一本は俺の顔の横を通り公園の木に突き刺さった。

立て続けに放たれた3本の矢に対して3回指を弾く。舞い戻った矢によつて射手は短い悲鳴と共にその場に倒れた。

これが俺の力…呪われた力だがな。

ふと視線を動かすと、右手を抑えて今にも倒れそうな小僧が目に入つた。俺はその場に崩れ落ちかけている小僧に駆け寄り抱きとめる。

「おい、大丈夫か…」

「…ぐあ…」

麻痺系の毒でも仕込まれていたのだろう、小僧の体は不規則に痙攣を繰り返していた。

俺は意識を失いつつある小僧の右手袋を破き去り、止血を施した。意識が朦朧としているのか小僧は左手を空に泳がせ何かを優しく掴むような仕草を見せる。

「…か…かあ、さん…」

そこで小僧は力尽き、意識が途絶えたようだつた。

俺は近くのベンチに小僧を寝かせ、俺もベンチに静かに腰かけた。

やはり、こいつは今倒れるべきではない。

愛する者を愛する資格がある者は倒れるべきではない、と俺は思
う。

「く……」

「む、小僧やつと田を覚ましたか」

俺はベンチに腰掛け煙草に火を付けようと指を弾く。煙草に火が
灯り、煙が満月の浮かぶ空へと舞い上がってゆく。
煙が体中に循環し満たされる。俺は両眼をつむりてその至福の時
を味わっていた。

「余裕だな……俺が攻撃してくるとは考えないのか?」

「ふ、お前はそんなことしなさい……」

小僧の頭の上に疑問符が浮かぶ。

俺は思つていることをそのまま言葉に乗せて小僧へと運んだ。

「小僧、優しそうだからな。お人好しつてやつだろ。優しすぎるほ
どに……な」

一瞬呆気にとられたような顔をして、少しの間をおいてムスッと
不機嫌な表情を浮かべる。

思ったよりも色々な表情ができるんだなとよくわからないと、ついに感心した。

「ふん、そのうち寝首を搔かれるタイプだなあんたは
ははは、そう機嫌を悪くするな。…ん？」

「……？」

「いや、気にするな」

ピクリと『領域』内にノイズが走り、俺に信号を送つてくれる。
わかつてゐる…もう急かすなよ。

小僧は体を起こし、俺の隣に腰掛けた。

呼吸は弱弱しく体力魔力共に限界に近付いていた。そのまま放つておけば一時間としないうちに死ぬだろう。

仕方ない…か。

俺は懐からナイフを取り出すと左腕に一筋の傷を入れた。
ピリッとした痛みと共に血がトクトクと溢れ出る。

「なーあんたなにして…」

「おら、小僧血やるから飲め」

俺は左腕を小僧に突き出して血を飲むように催促する。

小僧は吃驚した後自嘲的な笑みを浮かべた。

「いらないよ…」

「いいからめつづーの、格好つけんな小僧が。 ここで倒れて約を
破棄する気か?」

「あんたなんでそれを… イタツ! 無理やり押し付けんな!」

問い合わせられる前に小僧の顔を腕に無理やり押しつけるようにする。俺の言葉を聞いてか今度は大人しく飲み始めたようだ。どんどん回復していく様が手に取るように分かる。

小僧が回復しきった時には俺の方が吸い取られてしまっていた。

「小僧、存分に吸つたか？」

「あ、ああ…」

「じこたま吸いやがつて、もう力でねーよ」

「……すまない」

久しぶりの血に夢中になってしまったのだろう、小僧は顔をうつ向け謝つてきた。

俺は元気を見せるために力を振り絞つてベンチから勢いよく立ちあがつた。

「ま、気にするこいつたねーな！さて、と…俺は今からある奴とここで会つんだ、ほら行つた行つた」

「……そつか…なら、最後に名前を聞かせてほしい」

少しの逡巡の後、最後に、という言葉を少し強調した。

どうやら俺の空元気なんぞ見抜かれていたらしい。

ならば隠すこともあるまい。守る者がいるやつにもう一人託してみよう。

そして、ヴァンパイアの花嫁が俺に託した一つの約と同じ約をこいつに託してみよう。

「俺か？俺の名前は銀次、崎守 銀次だ、もう会う事はないがな！」

「ありがとう。銀次…さん、またいつか…いや、冥府の淵で会おう」

「ああ、最後に一つ頼みがあるんだが聞いたやくれないかい？」

「俺にできることなら、なんでも」

「暫くした後に、」この街に桜って娘が来ると思つんだが、もし会つたら一度でいい…守つてやつてくれないか？」

「……覚えていたらな」

まあ一度でも関わりを持てば桜が小僧の方を放つては置かないだろうが、というのは伏せてこいつ。

俺なりのいたづら心つてやつだ。

「桜はよう、まだ正式な退魔師じゃないのに付いて行くつてひるるさくてなあ。一人の父親として、心配なんだよ…。頼んだぞ」

「俺もヴァンパイアのはしぐれ、約はしかと受け取つた」

小僧は公園の出口へゆつくつと歩を進めていった。

これが俺と小僧の最後の会合。

罪を背負い、留まり続ける事しか知らぬ俺。

田の前の重圧に耐えられずに立ち止まつていてる小僧。

まだ進むことはできる可能性が小僧にはある。

ならばせめて、俺は隣で立ち止まつている小僧に通過点として一

つのメッセージを送りうつ。

「なあ、小僧……言つておきたことがある

「…なんだ」

「どこかへたどり着くためには、今いる場所を離れる決心をしないとダメだ…。これを覚えておけ。」

一つを選んでしまつた者から、選択の岐路で立ち止まつている者への最後の言葉。

「その言葉…心に留めておく。だが、俺は自分自身で道を拓く」

歩を出たつともがく者から、自己満足を選び続けた者への最後の言葉。

退魔師はその場に残り
ヴァンパイアはその場を後にした

その場に残つた退魔師は、最後の戦へと赴く。

「さて、出て来な…ジョイグ」

茂みから出でくるは、暗闇に生きる者。

「ククク…、吾輩も甘く見られたものだ、崎守銀次よ。わが血肉に宿る愛する者の恨み、今こゝで晴らしてやるッ！」

愛する者を失つた者同士の戦いの舞台が今こゝに静かに幕を開ける。

「暴走を完璧なまでに抑え込んでいる精神力には感服するが、簡単にはやられんぞ」

永き愛の戦いに純然たる決着を…死をもって救われるまで。

「ほやけ、死に体がつ…」
「退魔師・崎守銀次、参るッ！」

一人は舞踏のように舞い踊る。

満月の舞踏会、くるくるこむへこむへと進みます。――。

♪うう・・・かなー?♪

(後書き)

短編です。短編なのに…なんでこんなに伏線を残すのかと（怒）自分にドロップキックをましたい今日この頃、兄琉です。

今回の作品は位置づけとしてサブストーリーなので少し短めでした。ついでにバトルもありません。若干銀次の力とが出てきましたけど…。

長々と書くのもアレなのでやめておきます。

今回もここまで読んでくださった方、ありがとうございました。
少し興味を持って今作を読んでくださった方、前作共々可愛がつてくださいるとうれしいです。

では、今日はこのあたりで…感想評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5305f/>

ヴァンパイアなんて怖くない！？～銀と月～

2010年12月13日11時54分発行